

「新型コロナウイルスとの闘い、 在外の学校現場から」

ロシア モスクワ日本人学校 石川 賢

目次

- ① 学校の規模や子どもたちの実態
- ② 現地の新型コロナウイルス事情
- ③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければいけなくなった経緯
- ④ 実際の取り組み
- ⑤ 苦労した（している）こと
- ⑥ 喜びを感じた（感じている）こと
- ⑦ 今後への課題

①学校の規模や子どもたちの実態

- モスクワ日本人学校は、昭和42年（1967年）にモスクワ在留邦人の強い願いにより開設され、以来53年の歳月を刻んできた歴史と伝統のある学校である。
- 開設当時16名だった児童生徒も現在では94名（6月1日現在 小学部75名と中学部21名）を数えるようになり、アットホームな雰囲気の中で楽しく学んでいる。
- そんなモス日にもコロナウイルス禍は容赦なく襲い掛かってきた。当初、4月13日に予定していた令和2年度のスタートが、日を追うごとに広がり続ける感染の影響で、4月13日➡ 5月6日➡ 6月1日➡6月22日と、再開の延長と再延長を余儀なくされている。
- しかし、休業が長期化するなかでも、子どもたちはオンライン学習に前向きに取り組んでいる。
- 学校だより第1号の冒頭に、「いちばん辛いのは、友だちに会えないこと。でも、みんなの顔が見られて声が聞けて嬉しい。スイッチが入ります。やる気が湧いてきました。」と、子どもたちの思いとオンライン学習初日の様子を記した。外出できない不自由な生活が続いている。
- 心細くなり不安になることもある。しかし、そんな時こそ仲間は大きな力になる。子どもたちは、大事なことを学んでいる。

② 現地の新型コロナウイルス事情

- 3月半ば、新型コロナウイルス感染症が西ヨーロッパですごい勢いで広がっている頃、プーチン大統領は、「感染数はコントロールされている」と公表していた。しかし、状況は徐々に悪化してきた。
- 4月2日、プーチン大統領は、「新型コロナウイルスは国民の大きな脅威になっている。モスクワ市では、当局の対策にもかかわらず状況は打開できていない。ほぼ全ての産業の非労働期間を4月末まで延期する。高齢者を守ることと、学校などでの集団感染の防止が重要である」と表明した。これを受け、モスクワ市も市民の外出禁止令を5月1日まで延長することにした。
- その後、プーチン大統領は5月11日のテレビ演説で、6週間続いた「不就労期間」を終了すると発表。新型コロナウイルスで大打撃を受けた経済を立て直す第一歩だった。しかし、同時に、新型コロナウイルスのアウトブレイク（大流行）の終息には程遠い状況だと警告した。
- ロシア国内のアウトブレイクの震央となっている首都モスクワでは、全体の感染者数の半数以上が確認されている状態が続いている。また、全体の死者数の半数以上もモスクワが占めている状況から、モスクワのセルゲイ・ソビャニン市長は、同市のロックダウンを5月31日まで延長した。建設業や製造業など、一部再開されたものの、厳しい制限措置は継続している。店舗や公共交通機関でのマスクと手袋の着用が義務づけられ、食料品購入の外出時には移動のための電子許可証を携帯しなければならない。市民はいまも買い物や通勤、犬の散歩以外の外出はできない状態が続いている。
- 5月初旬、外務省が発出している危険度情報もレベル3（渡航中止）に引き上げられ現在に至っている。

③ 新型コロナウイルスの対策を講じなければ いけなくなった経緯

- 2月5日の学校運営委員会でも話題になった。席上、ロシアにおける新型コロナウイルス対策について次のような情報交換が為された。

「新型コロナウイルスについて、ロシアはこれまで2例発生しているが、いずれもロシアに戻ってきた中国人のケースである。日本と違ってロシア国内ではヒト➡ヒトの感染例はない。ロシアと中国の陸上国境は閉鎖されており、空路は北京・上海・広州・香港の4都市間に限定され、そこで渡航者は検疫を受けることになっている」。

話を聞きながら、「ある意味、日本より安全」という思いと、おそらく歴史に残る年度がコロナ禍に覆われてスタートすることに漠然とした不安を感じた。
- 日本国内では3月いっぱい臨時休業措置がとられる中、予定どおり年度末を迎えることにした。卒業式・修了式を予定どおり実施し、その喜びを、卒業式の式辞で「新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっています。大勢の人々の生活にも大きな影響を与え、卒業式が出来ない学校もあります。そのような中、卒業式を挙行できることは幸せなことです。ご来賓の皆様のご臨席を賜り、保護者の皆様と共に小学部10名、中学部6名の卒業生の門出を祝福できることは何よりの喜びです。」と述べた。コロナウイルス禍が本格的に押し寄せてくる間際の対応だった。

- 感染はアジアからヨーロッパに広がりを見せていたが、令和2年度の始業は、予定どおり4月13日に行うこととし、そのまま、子どもたちが楽しみにしていた年度末・始め休業に入った。
- しかし、例年と違い、春休みに合わせて一時帰国をする家庭や旅行に出かける家庭はほとんどなかった。本校では、各家庭から春休みの子ども（家族）の動静を提出してもらい、それを大使館に報告しているが、今年の動静にはこれまで以上に気を配った。軌を一にして、イタリアやスペイン、イギリスを中心にウイルス感染が一気に広がりパンデミックの様相が見られるようになった。
- コロナウイルス感染の波は確実にロシアにも押し寄せ、令和2年度の始業を5月6日まで延期することを余儀なくされた。以後、手探りの学校運営が続いている。

④ 実際の取り組み

(1) 今やるべきこと、やれることに集中する

- 外出制限が強化されたことで、学校に出勤できなくなってしまった。そして、移動する際には事前登録制の許可証が必要となり、原則不要な移動は禁止された。閉鎖状態である。このままでは、オンライン学習支援の準備ができないし、始業式（4月13日）までに配付することになっていた教科書配付もできなくなってしまう。最初の試練である。早速、緊急職員ズームミーティングを行い、臨時休業中の諸々の対応について話し合った。
- オンライン学習支援をどう進めていくかは、未体験のことだけに議論伯仲した。しかし、話し合いの中で、「子どもの側から考えていきたい。最初はずきくこともあるだろうが、子どもたちや保護者との信頼関係を築く第一歩として失敗を恐れずに歩いていこう。休業期間中に私たち教師がやるべきことは、学校再開までに、子どもたちが学ぶことへの期待をふくらませること。形は違うが、新しい年度を迎えた子どもたちの『背伸びする思い』に応え、励ますことができるよう敢えて試行錯誤を重ねていこう」という思いを共有することができた。同僚それぞれの存在が、互いに勇気を与え合っている。「チームモス日」の力を改めて感じた。

(2) 厳しい状況下の教科書配付

- 教科書配付については、当初保護者に学校へ取りに来てもらうことを予定していたが、それが叶わない状況になり、学校から配付することにした。教科書配付が学習支援の第一歩になることを確認し、「真新しい教科書を手にした子どもたちの笑顔を思い浮かべる」という思いを共有して、移動制限が始まる前に教科書を配付することにした。残された時間は移動制限が強化されるまでの数日間である。
- まず、大使館の全面的な協力通勤のための「口上書」を発行してもらい、出勤できる体制を整えた。そして、時間帯を決めて出勤し、休業中の課題と一緒に教科書の袋詰め作業を行った。
- 教科書配付は、スクールバス利用者分と自主登校者分に分けて行った。その時点の在籍児童生徒は96名。その内訳は、スクールバス利用者が73名、自主登校者が23名である。
- スクールバス利用者分については、子どもたち全員の住所と連絡先を確認し、バスストップごとの担当者をお願いして配付計画を作成した。もちろんスクールバスは運行していないので、運搬は学校のミニバンを使用した。市内の道路事情に詳しい現地スタッフ（ドライバー）の協力がなければできないことだった。
- また、時間に限りがあるということで、大使館職員の方が一部のルートの担当を申し出てくださった。感謝の言葉しかない。自主登校者分についても、全ての住所と連絡先を確認し、各家庭と連絡を取り合い引渡し場所・運搬方法を打ち合わせた上で、各家庭を訪ね手渡しした。
- 教科書配付が大きなトラブルがなく予定していた日数で終わったのは、保護者及び大使館の協力のお陰である。どの引き渡し場所でも、温かい労いの言葉で迎えてもらった。また、大使館職員には実際に分担してもらった。日頃の関係づくりの大切さを痛感した教科書配付だった。

(3) オンラインの学習支援 悪戦苦闘、試行錯誤の積み重ね

- 安否確認ができればよい。最初はその程度に考えていたオンラインの学習支援だが、学校再開が遠ざかる中でその重要性は一段と増してきた。これまで経験したことのないZOOMミーティングを活用した学習支援だったが、教師一人一人が自分なりの工夫を重ねた。
- 先が見えない中での試行錯誤の連続だから、心理的な負担は決して少なくないはず。それでも、子どもたちや保護者は、この学習支援を何よりも心待ちにしている。その思いに応えるのが教師の責務だ。今私たちがやるべきことは、「教室」を奪われた状況の中で何ができるのかを考え、その知恵をより充実した支援につなげていくことではないだろうか。こういった難局を迎えている時だからこそ、お互いに専門家として学び合うことを大切にしたい。
- そんな思いで、未だにモスクワに着任できず日本で待機している新規派遣教師も加えて、前向きに取り組んでいる。オンライン学習支援の時間は限られているが、それを克服しようと入念に準備をして臨んでいる。

- 毎日職員ミーティングを行っている。その日の支援を振り返り、子どもの様子とオンライン学習の課題等を共有しようというものだ。誰も経験したことのないオンラインでの学習支援である。決して容易なことではない。しかし、どの教師も、状況を真摯に受け止め前向きに取り組んでいる。
- 1年生のミーティングを参観した教師から次のような感想が聞かれた。

「子どもたちは、互いに役割分担しながら教科書の絵を参考にして、あいさつを交わすことを考えていました。（担任）『Aさん役は〇〇君。Bさん役は●●さんをお願いします』。（子ども）省略。
（担任）『上手にできましたね。“おはようございます”と“おはよう”と出てきたけど、どんな時に“おはようございます”と言うのかな？…。』といった具合に学習が進んでいました。

もちろん、指導のねらいはここにあるのですが、担任がここで大切にしていたのは、子ども同士のやり取りだと思います。ほとんど面識のない子ども同士、ネット上で名前を呼び合ったり、あいさつを交わしたりすることは時間もかかり、容易なことではありません。しかし学校が再開され、新1年生の子どもたちが喜々として活動を始めするためには必要な支援なのだと思います。」等々。
- 試行錯誤の連続のオンライン学習支援だが、保護者の全面的な協力もあって、子どもたちは規則正しい生活リズムで学習に向かうことができている。また、友だちの元気な笑顔に会えることに喜びを感じながら、学校への思いをふくらませている。オンライン学習支援の試行錯誤は続いている。

(4) 学校再開に向けた取組

- 学校再開日と暫定的に決めた6月1日が迫ってきた。予断を許さない状況が続くなかではあるが、先行きの指針を示さなければならない。大使館や学校運営委員会とはメールのやり取りで意見交換し、学校運営委員長とは繰り返し直接協議を重ねた。そして、現時点での方針として、学校の基本方針と今後の見通し、そして、感染防止・拡大の対策を「学校再開に向けて」としてまとめた。
- 先が見通せない、正に「神のみぞ知る」状況が続いているが、以下の基本的な考えに基づき、今後の対応の基本的指針として、段階的な学校再開を目指すことを記した。
 - 学校における感染リスクをゼロにするという前提に立つ限り、学校に子どもが通うことは困難であり、休業状態が長期間続けば、子どもの学びの保障や心身の健康などに関して深刻な問題が生じることになることを懸念している。
 - 学校再開が可能となった場合でも、保護者や児童生徒の感染症への不安がすぐに払しょくされるわけではない。社会全体が、長期間にわたりこの新たなウイルスとともに生きていかなければならないという認識に立ち、その上で、子どもの健やかな学びを保障することとの両立を図るため、学校における感染及びその拡大のリスクを可能な限り低減しつつ段階的に実施可能な教育活動を開始し、その評価をしながら再開に向けての取組を進めていく必要がある。
 - 感染症対策を徹底しつつも、感染リスクはゼロにすることはできないという事実を前提として、ロシア及びモスクワ市衛生管理部局の指示の下、大使館や医療機関と連携したモスクワ日本人学校における保健衛生体制を築いていきたい。

⑤ 苦労した（している）こと

- 年度始めの対応を協議しているなかで、「朝令朝改」という言葉を聞いた。判断の遅れが許されないことがある。間違ったら修正すればいいだけのこと。朝令暮改でも遅いくらいで、「朝令朝改」で決断しないと取り残される。そんな逼迫した現況を象徴する言葉と受け止めている。先の見通しを確かにもつことができないなかでも今後の指針を出していかなければならない。臨機応変というが、刻一刻と変わっていく状況を正確に把握し判断することは至難の業である。もちろん、言葉の問題もある。
- 不安定な状況が続いている。学校運営は、この「不安定」を引き受けるところから始めたい。また、目まぐるしく変わっていく流れの中でも、変わらないものは何かを考えることも必要である。状況が刻々と変わっていくときだからこそ、我が子の成長を願い、それを学校に託す親の思い、友だちや担任との出会いに心躍らせる子どもの思いに真摯に応えるという学校教育の原点を見失わず、学校の機能を発揮し続けていく。その覚悟が校長には求められている。

⑥ 喜びを感じた（感じている）こと

- 学校に温かい思いを寄せる人たちとの信頼関係を、これまで以上に強いものにしたことが何よりの喜びである。日ごとに状況が悪化していくなかで、帰国を思い留まりモスクワで新年度のスタートに備えた方々がいる。新学期に合わせて、取るものもとらずあえずモスクワに戻られた方や新しくお出でになった方がいる。世界中を巻き込んで拡大する新型コロナウイルス感染症に翻弄されながらも、心細さと不安をぐっと抑えて前を向く子どもたちがいる。そういった保護者や子どもたちの学校に寄せる思いを大切にしたい。
- また、モス日の絆の強さを改めて感じることもできた。オンライン学習等の様子がテレビニュースで報じられたこともあり、いろいろな方から励ましのお便りが寄せられている。中に、モス日OBの便りも何通があった。いずれも、モス日の子どもたちに少しでも元気と笑いを届けたいという思いが認められていた。早速、学校だよりで保護者の皆さんに紹介した。OBの励ましのメッセージからは、我が校が開校以来積み重ねてきた営みの確かさを感じた。
- 北米・欧州地区日本人学校長会の情報交換も有難かった。同じ境遇で職務に専念する校長先生方の姿に勇気付けられたし、メール上で行われる情報交換は、常に実質が伴う示唆に富むものだった。

⑦ 今後への課題

- 新規派遣教師の一日も早い着任を切に望んでいる。がしかし、これは現場がどんなに頑張っても、それで叶うことではない。むしろ、今やるべきことに集中し、それをやり切ることが私たちの務めだ。
- やるべき課題は山積しているが、第一に考えなければならないのは、いかに正確な情報収集を行い、それを基に的確な判断をするかである。学校運営委員長は、ロシア勤務が長くモスクワ・ジャパンクラブきってのロシア通である。また、大使館には情報収集に精通した専門家の方々がいる。いずれもいろいろな事情に通じている情報収集のプロである。
- しかし、そのプロをしても先を見通すことは「神のみぞ知る」世界という。素人の私には任が重いが、それだけに、きめ細やかな連携は欠かせない。学校運営委員会・大使館、そして、保護者と連携していくことは日本人学校の運営の基盤となる。

- 休業が続く中でオンラインの学習支援が一層重要性を増してくる。幸い、保護者の全面支援で子どもたちは順調に学習を進めている。ただ、オンライン学習を評価しつつ、その拡充を望む声は多い。しかし、その思いに十分に応えられないでいる。
- 兄弟姉妹関係があり同時展開ができないことが課題となり、保護者の要望を受けて時間を増やすことが難しい。今後、さらに休業期間が長期化するとすれば、真っ先に解決しなければならない課題である。
- 軌道に乗ってきているものの、時間を増やすとすれば、教師の負担も増える。通常授業の準備の倍の時間をかけてオンライン学習支援を続けているという現状もある。子どもたちの学習保障に集中できるよう環境を整えていかなければならない。
- 幸い、職員の中には、「難局を迎えている時だからこそ、互いの知恵と力を出し合っていこう」という思いが強い。そして、常に協力を惜しまない方々がいる。その思いに感謝しつつ、未来を拓く確かな資質・能力を身に付けた子どもたちを育む教育に邁進していきたい。